

―探求・川にちなんだ万葉集の歌―

万葉の川心 第26回

川崎市立木月小学校教諭 船田 園子

川を詠む（巻第十一 二四三―番歌）

鴨川ののちせ後瀬静けく後も逢はむ

妹にはわれは今ならずとも

新しい土地で暮らすとするとき、人はたかさんの出合いをする。今まで知らなかった人たちが、お隣さんとなり、子どもを通じた友となり、なじみの店のマスターとなる。そのうち、子ども心がうずいてきて、路地を探検したくなる。今日は右の道を。今日は一本向こうの通りを。そうやって通勤の道を少しそれると、思わぬ景色に出合う。

「ここにも・・・」

川との出合い。水の流れの傍に暮らしていると知ったとき、なんととも言えぬ優越感が沸いてくる。ここを選んでよかったと安堵する。なぜなのか。とりわけきれいな川でなくても、そこに流れているだけでいい。土手があり、鳥が飛び、草がたくましい生命力をみせつける。その横を静かにおだやかに川が流れていく。それだけで。

「なぜだろう。」

次の日曜日、早起きをして土手を歩いてみようか。その答えがみつかるかも知れない。いや、みつからなくてもいいのだが。

鴨川は京都の賀茂川説もあるが、続日本紀の記事に「幸鴨川」。改名為「宮川」とある木津川とする説もある。木津川とは奈良県の宇陀に発し、伊賀を過ぎ、泉地を流れ、木津から北流して淀川に合流する川である。流域の加茂町は和名抄に見える賀茂郷の地であるそうだ。

歌に出てくる「後瀬」とは、下流の瀬の意味である。下流に行けば波も穏やか、流れも静か。「今は噂の二人でも、鴨川の下流のようにやがて静かになるだろう。今でなくとも後に逢おう。」「ノチ」はもともと時間についていう言葉である。この頃から時が流れていくことが重ねて考えられていたと思われる。下流の穏やかさを世間や自分たちの心の穏やかさになぞらえているところも、また、万葉人の川への親しみを感じるのである。

噂になって逢えなくなる。許されぬ恋なのか、世間のあたりは恋する二人に辛いものなのか。離れたら終わりだと人の言う。恋に「後」はあるのか否か。いや、噂さえ、しがらみさえ、川になぞらえ、すべてを恋の分子として取り込み、飲み込み、楽しんでしまふ華やかなたくましさは万葉のたかさんの歌に感じるのである。山に親しみ、川を愛で、恋を楽しむ。もう一度、道を一本それてみようか。本当の自分を見つけるために。新しい川と出合っために。

日曜の土手は、朝早くから人が行き交う。ランニング、犬の散歩、競輪の練習に、バターゴルフ、空にはラジコンヘリコプター。思い思いの人の流れとすれ違おう。ばらばらの人生が集まってくる。肩に乗せた「日常」という荷物をおいて、ここに来る。